九州王朝論
章　栄光の姫氏 •熊氏

古代九州文明を築いた日本人

古代九州の姫氏と熊氏

『古事記』「州産み」の中の熊襲

『記紀』は「熊襲」について記録している。「熊襲」とは何者か。
熊襲の名が日本の史書に登場するのは、遙かに古い。『古事記』上巻・「州産み」神話に登場する。

> 次に筑紫島を生みき。此の島も亦、身一つにして面四つあり。面毎に名有り。故、筑紫国は白日別と謂ひ、豊国は豊日別と謂ひ、肥國は建日向日豊久士比泥別と謂ひ、熊襲國は建日別と謂ふ

この筑紫島は通常九州全体、或いは、福岡県を指すと理解されているが、そうではない。州生みの筑紫嶋は門司区古城山である。
州産みによって作られた弥生国家は関門海峡に面した小さな弥生集落だった。州生みは「島生み」とも表記されているが、実体は、小さな州（半島）に小さな弥生集落と作ったということである。「作った」といっても初手から作ったのではなく、既に存在していた弥生集落を統合したのが大八洲建国物語である。
「筑紫島は九州」、「大倭豊秋津嶋は本州」、「伊予之二名嶋は四国」、このような現代地図に依拠した大八洲認識は「州生み」の実態ではない。州産みは彦島を中心とした関門海峡の島々に存在した弥生集落を1つの権力の下に統合したという史実である。
伊邪那岐命、伊邪那美命は「天つ神」の命令に従って小倉北区の「オノゴロ島」にくだって、居を構え、州産みに向かった。「天つ神」とは彦島に存在した「天（あま）」の神だった。「天（あま）」とは天上の意味ではない。別の章で詳しく述べるが、「天（あま）」とは元は王の名である。
伊邪那岐命の娘、天照大神は彦島・小戸で生まれ、「高天原」で育った。「高天原」とは「高・天の原（あまのばる）」の意で、彦島・老の山公園である。ここが「天（あま）」一族が支配する高地性弥生集落だった。

筑紫嶋には四つの国があった。「筑紫」「豊」「肥」「熊襲」である。それぞれに亦の名がある。

> 筑紫国は白日別と謂ひ、豊国は豊日別と謂ひ、肥國は建日向日豊久士比泥別と謂ひ、熊襲國は建日別と謂ふ　（『古事記』上巻）

ここに熊襲が登場する。これは「州産み」の時代にすでに熊襲という国があったということであるから、熊襲の歴史はイザナギ・イザナミ建国の時代より古い。
今、熊襲国のもう一つの国名「建日別」の意味を考えてみよう。「日」は「日の出る方向」と云う意で、東を意味する。「建」は国名だが、正確には人名で「建（たける）の國」という意となる。「別」は分国を意味する。
「建日別」は「建の國の東の分国」という意味となる。州生みの時代に「建の國」が西に存在すると人々は知っていたのである。この西の國がいわば「建の本国」である。「天（あま）」の人々は「西に建の本国が存在している。」「その分国が筑紫嶋の建の國だ」と認識していたのである。

『古事記』神武天皇の熊野

故、神倭伊波禮毘古命、其地より廻り幸でまして、熊野村に到りましし時、大熊髪かに出で入りて即ち失せき。爾に神倭伊波禮毘古命、にわかに遠延為し(病んで)、及御軍も皆遠延て伏しき。

(『古事記』)

神武東征は奈良ではない。神武東征は二度にわたって行われた。最初は小倉北区・足立山の麓にあった「日向・高千穂宮」から「筑紫・岡田宮」へ遷り、1年滞在し、次に「阿岐國・多祁理宮」に遷り、7年過ごした。これが最初の「東征」である。その目的は「天の下」の政治的な統治目的で、軍事ではない。「岡田宮」「多祁理宮」はかって伊邪那岐命、伊邪那美命が切り開いた「大八州」の國に存在した宮である。

二度目は「吉備(彦島)」から海路で「東征」に出発した。関門海峡を通過、企救半島北端を廻って南下し、門司区・吉志に侵入した。「長臑彦」との緒戦で敗れた神武は一旦退却する。そして迂回したのが「熊野」であった。「熊野の邑」で神武一行は不思議な体験をする。神武は急に体調を崩し、、全軍も不意の病に襲われた。この窮地を「天照大神」と「高木神」が救うのであるが、その後、「高木神」が神武を諭す。

天つ神の御子を此れより奥つ方に莫入り幸でまさしめそ。荒ぶる神甚多なり。今、天より八咫烏を遣はさむ。故、其の八咫烏引道きてむ。其の立たむ後より幸行でますべし

場所は「熊野」、現れたのは「大熊」である。「天」の神、高木神の忠告は、「熊野には荒ぶる神が沢山居る。これより先には行くな」である。神武と敵対していたのが「熊襲」である。神武が迷い込んだ場所は強力な熊襲王が支配する土地だった。神武が最初に侵入を試みた熊襲國とは企救半島「吉志(きし)」である。

『日本書紀』景行天皇の熊襲

熊襲が再び『日本書紀』に現れるのは景行天皇である。

景行十二年七月、熊襲反きて朝貢らず
景行十二月五日、熊襲を討たむことを議る。是に、天皇、群卿に詔して曰はく、「朕聞く、襲国に厚鹿文・**迮**鹿文といふ者有り。是の両人は熊襲の渠帥者なり。衆類甚多なり。是を熊襲の八十梟帥と謂ふ。其の鋒当たるべからず。師興すことは少くは、賊を滅すに堪へじ。多に兵を動かさば、是百姓の害なり。何か鋒刃の威を借らずして、座づからに其の国を平けむ」とのたまふ。時に一の臣有り。進みて曰さく、「熊襲梟帥、二の女有り。兄を市乾鹿文と曰す。弟を市鹿文と曰す。容既に端正し。心且雄武し。重き幣を示せておもとにめしいれるべし。因りて其の消息を伺ひたまひて、不意の処を犯さば、かって刃を血さずして、賊必ず自ら敗れなむ」とまうす。天皇詔はく、「可なり」とのたまふ。是に、幣を示せて其の二の女を欺きて、幕下に納る。天皇、則ち市乾鹿文を通して陽り寵みたまふ。時に市乾鹿文、天皇に奏して曰さく、「熊襲の服はざることをな愁へたまひそ。妾良き謀有り。即ち一、二の兵を己に従へしめたまうべし」とまうす。而して家に返りて、多に醇き酒を設けて、己が父に飲ましむ。乃ち酔ひて寝ぬ。市乾鹿文、密に父の弦を断つ。ここに従へる兵一人、進みて熊襲梟帥を殺しつ。天皇、則ち其の不孝の甚しきことを悪(そのくに)みたまひて、市乾鹿文を誅す。よりて市鹿文を以て、火国造に賜ふ。景行十三年の夏五月に、襲國を平けつ。　『日本書紀』景行天皇

熊襲の王の名は「厚鹿文」である。「**迮**鹿文」はその弟であろう。兄弟で熊襲國を統治していたと思われる。熊襲国を攻める時、景行は力攻めで、「厚鹿文」を討ったのではない。

「厚鹿文」には二人の娘がいた。まず、その娘を召し抱えて、様子を探り、不意をつけば征伐できるでしょう、という臣の献策を受け入れて、娘二人を側に召し抱える。そして、姉娘が父「厚鹿文」に酒を飲ませ寝たところを景行の部下が殺した、と記している。女を利用しただまし討ちである。しかし、景行は功労者の姉を、「親不孝が過ぎる」と言って殺してしまう。そして、妹を「火国造」に任命した。勝手すぎるといえる処刑であるが、とにかく姉のおかげで景行は武力によらず「熊襲の王」を伐った。

その翌年には「悉の襲國を平けつ」と記すので熊襲は王を失い、平定されてしまったということであろう。景行十三年の事で、景行紀はまた次の記事を載せている。

> 景行二十七年秋八月に、熊襲亦反きて、辺境を侵すこと止まず。
> 冬十月十三日、日本武尊を遣して、熊襲を撃たしむ。
> (日本武尊)十二月に、熊襲國に到る。因りて、其の消息及び地形の嶮易を伺たまふ。時に熊襲に魁帥者有り。名は取石鹿文。亦は川上梟師と曰ふ。・・・是に、日本武尊、**梱**の中の剣を抽して、川上梟師が胸を刺したまふ。未だ及之死なぬに、川上梟師叩頭みて曰さく、「且待ちたまへ。吾有所言さむ」とまうす。時に日本武尊、剣を留めて待ちたまふ。　　『日本書紀』景行天皇

景行は熊襲を滅ぼしたが、それは熊襲の一人の王を暗殺したにすぎなかった。熊襲国家は存続していた。そして新しい王が居た。そこで、今度は16歳の小碓尊を遣した。出発が10月13日、熊襲國到着が12月である。約2ヶ月の行程で、熊襲國は西の方と記している。倭建は西の熊襲國まで出向き、酒席で「取石鹿文」を刺す。

> 川上梟師啓して曰さく、「汝尊は誰人ぞ」とまうす。対して曰はく、「吾は是、大足彦天皇の子也。名は日本童男(やまとをぐな)と曰う」とのたまふ。川上梟師、亦啓して曰さく、「吾は是、国中の強力者なり。是を以て、当時の諸の人、我が威力にへずして、従わずといふ者無し。吾多に武力に遇ひしかども、未だ皇子の若き者有らず。是を以て、賤しき奴がいやしき口を以て尊号を奉らむ。若し聴したまうや」とまうす。
> 曰はく、「聴さむ」とのたまふ。即ち啓して曰さく、「今より以後、皇子を号けてたてまつりて日本武尊と称すべし」とまうす。
> 言訖りて乃ち胸を通して殺したまひつ。故、今に至るまでに、日本武尊と称め曰す。是其の縁なり。然して後に、弟彦等を遣して、悉に其の輩を斬らしむ。余もの無し。既にして海路より倭に還りて、吉備に到りて穴海を渡る。

川上梟師は日本童男に「日本武尊」という称号を与えた。この称号は神武天皇家には無い。熊襲の称号であるが、しかし、日本童男が以後この称号で呼ばれたということは、この称号の格は高いことを示す。この称号の表記は古事記では「倭建」である。「日本武尊」は日本書紀の立場からの名称で、本来は、古事記が伝える「倭建」であろう。神武天皇家は自国を「倭(やまと)」と称していたが、「倭」は「やまと」とは読む事はできない。神武が征服した国は「倭国」と呼ばれていた。その国を「やまと」と神武は自称した。元々の国名である「倭」をそのままにして、「やまと」と名乗ったということである。従って「倭」と書いて「やまと」と読む。「倭健」は「やまと・たける」と読むことになる。

神武紀において「菟田縣」の「弟猾」が「倭國の磯城の梟師有り」と述べた「倭國」は神武が攻め入った国で、福岡県香春町である。香春町・田川市は当時「熊襲」が支配していた。しかし、「倭健」が出かけた「熊襲」の国は香春町ではない。『日本書紀』では、その後、日本武尊は西から海路で祖国「倭(やまと)」への帰路につき、「吉備」に到着して「穴海」を渡った。「吉備」は神武が造船した「吉備」で彦島西山町である。「穴海」は彦島と下関市との間の小戸である。ここは神武天皇家の聖地である。

田川市白鳥神社由来の熊襲

倭建の陵は三カ所ある。「伊勢」と「倭」と「河内」である。「倭」に当たる田川市には白鳥神社がある。地元の春日神社の宮司さんの話では、倭建の陵は別の所にあったが、この神社に倭建を祀ったとのことである。

この白鳥神社に由緒がある。倭建と景行天皇が熊襲討伐に出発した。その陣を敷いたのが「真中の山」である。その丘とは現在の白鳥神社がある小高い丘のことで、景行天皇と倭建が熊襲を伐つ遠征の際、陣を敷いた霊地である。

由来では、日本武尊は夢で伝教大師に、「昔麻剥を討つために行った高羽川の畔に祀れ」と告げる。こうして伝教大師は唐から帰国したのちに、その地に倭健を祀った。この夢に登場する「麻剥」とは熊襲王の名前である。「高羽」とは「田川」の本来の名で、この説話は『日本書紀・古事記』が書き記していない現地が伝える説話

である。

仲哀紀の熊襲

仲哀二年三月十五日に天皇、南国を巡狩す。是に、皇后及び百寮を留めたまひて、駕に従へる二三の卿大夫及び官人数百して、軽く行す。紀伊國に至りまして、徳勒津宮に居します。是の時に当たりて、熊襲、叛きて朝貢らず。天皇、是に、熊襲國を討たむとす。則ち徳勒津より発ちて、浮海よりして穴門に幸す。　『日本書紀』・仲哀天皇

ここには仲哀天皇が巡狩した国の名前が書かれてる。「穴門」とは倭建説話に登場する「穴海」と同じで、彦島・小戸である。

仲哀天皇は「紀伊國」の「徳勒津宮」に来ていた。その時に熊襲がまた叛いた。仲哀天皇は急いで、「紀伊・徳勒津宮」から「穴門（彦島）」に帰った。9月5日に群臣を招集して熊襲討伐を協議するが、神功皇后に神が降りて、「熊襲征伐は止めろ」という。神は「熊襲と戦うな」と、それとなく忠告をしたのであろう。

だが、仲哀天皇は若い。神の忠告を聞こうとしない。神の言葉に反して熊襲國に遠征する。しかし、この遠征は失敗に終わる。正面から戦って神武天皇家は熊襲國に敗北した。軍事力に差があったのであろう。彼我の力関係はこの時も熊襲が上だった。しかし、仲哀天皇の敗北は軍事力の差ではないのだ。神の宣告に従わなかったからだと、このように総括したのが、『日本書紀』の神の降下物語である。

『筑前國風土記』の球磨曾

『筑前國風土記』はこの時のことを記している。

筑前の国の風土記に曰わく、怡土の郡。昔者、穴戸の豊浦の宮に御宇しめしし足仲彦の天皇、球磨曾を討たむとして筑紫に幸しし時、怡土の縣主等が祖、五十跡手、天皇幸しぬと聞きて、五百枝の賢木を抜取りて船の舳艫に立て、上枝に八尺瓊を掛け、中枝に白銅鏡を掛け、下枝に十握剣を掛けて、穴門の引嶋に参迎へて献りき。

仲哀天皇が居たのは、「穴戸の豊浦の宮」である。「穴戸」とは彦島・小戸である。「豊浦宮」は彦島・小戸にあった。彦島から熊襲討伐のため、筑紫に向かおうとした。この筑紫は門司ではなく、「筑前・筑後」の筑紫である。その時、「怡土の縣主」の祖、「五十跡手」が、「穴門の引嶋」まで迎えに来た。「穴門の引嶋」とは「引嶋＝彦島」である。「怡土の縣」は前原市（怡土）である。『日本書紀』と『筑前風土記』は一致する。

『日本書紀』の熊襲認識

(1)　熊襲と一口に言うが国は一つではない。九州各地に存在した。「熊」は王名、「襲（楚）」は国名であろう。

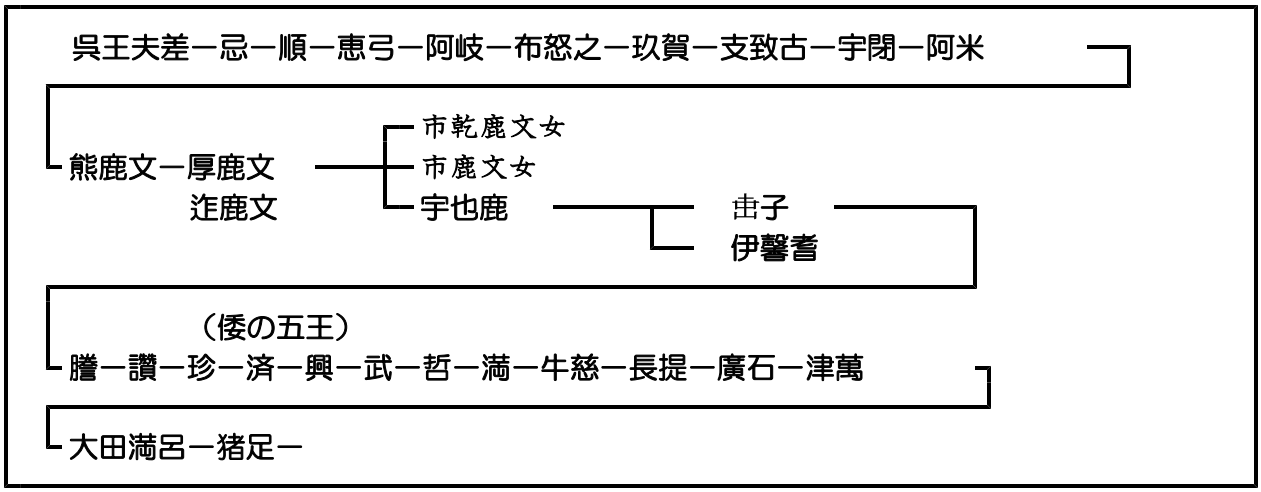
(2)　熊襲の王は「厚鹿文・**迮**鹿文・取石鹿文」と言う特徴ある名である。また娘も「市乾鹿文・市鹿文」と特徴ある名前である。「取石鹿文」は「川上梟師」とも名乗っていた。「梟師」という表記は私たちはすでに馴染み深い。神武紀に「赤銅の八十梟師」「磯城邑の八十梟師」が登場する。この二人も「タケル」を名乗っている。それを考えると、「取石鹿文」も「赤銅の八十梟師」「磯城邑の八十梟師」も熊襲一族だと考えられる。神武東征以前、熊襲一族が「赤銅（香春岳）」や「磯城（田川市）」を統治していたのである。
州産み神話では「筑紫國（門司）」の「熊襲」が紹介されているが、田川市にも「熊襲國」が存在していた。熊襲一族の歴史は古く且つ統治範囲は広かった。

(3)　「梟師（たける）」は、「建（たける）」と「武（たける）」とも表記した。「建」も「武」も熊襲の王の名前である。「建日別」という国名は「建の東の分国」という意味を持つ熊襲の分国であった。

松野連姫氏系図

「熊襲」に関する我が国の記録は以上の通りである。だが、「熊襲」とは一体何者なのか。辺境の野蛮人なのか。『記紀』からはその人物像が浮かび上がらない。ところがそれを解く鍵がある。「松野連姫氏系図」と云われるものである。

『太宰府は日本の首都だった』（内倉武久著・ミネルバ書房）の中にに紹介されている。。孫引きではあるが、どのような系図なのか。まず見てみよう。



系図は国立国会図書館と東京・世田谷の静嘉堂文庫の二カ所に所蔵され、「王の系図」と「書き込み」とで成り立っている。表題は「松野連姫氏系図」である。「姫氏の系図」であるが、この系図の中に「倭の五王」が登場する。

系図に関する内倉武久氏の解読・解説がある。

(1) 中国の史書に「周の元王三年、越は呉を亡し、その庶（親族）、ともに海に入りて倭となる」と記している。「周の元王三年」は「孝昭天皇三年」と同じ、紀元前四七三年である。中国・春秋戦国時代、周王室の王・豪族が独立したが、約五十国は「姫氏」の国だった。
(2) その「姫氏國」は戦国時代に次々と亡ぼされ、負けた国の王、一族は日本や朝鮮に渡った。日本で「紀」「木」「記」と表示される国は「姫氏」の国であろう。
(3) 「松野」の姓は「甲午の年（持統天皇六九四年）に負う」ということで、「姫氏」から「松（野）」の姓に変わった。故に「松野連」の系図と言う。
(4) 「忌」の所に「孝昭三年来朝。火の国山門に住む。菊池郡」とあるが、「孝昭三年」は「皇暦」では「紀元前四七三年」に当たる。

呉王「夫差（ユウヨン）」について

呉と越についてはよく知られた歴史がある。

(a) 夫差の父「闔閭」は「越」に攻め込む。だが、逆撃され、矢傷を負い、それが原因で 破傷風となり死ぬ。死に際して「夫差」を呼んで、自分の後継者とすべく、『勾践がお前の父を殺したことを忘れるな。』と遺言した。これが有名な「臥薪嘗胆」の「臥薪」の逸話が生まれた由縁である。
(b) 「夫差」は「伍子胥」の補佐を受けて「呉」の国力を充実させた。それを恐れた「越」の「勾践」が攻め込んで来たが、反撃して、「勾践」を追い詰めた。「勾践」は命乞いをし、「夫差」は「勾践」を許して帰国させた。
(c) その後、「夫差」は伸張した国力を背景に北の黄河流域へと進出して、覇者になることを夢見た。だが「伍子胥」は「越」の復讐を恐れて北へ進出することを諫めた。このことで「夫差」は「伍子胥」に辟易し、ついに紀元前484年に「伍子胥」に死を賜ることとし、自決用の剣を授け、「伍子胥」は自決した。
(d) 紀元前485年、「夫差」は軍を率いて「斉」を討ち、会盟を開いて「呉」が諸侯の盟主であると認めさせようとした。だが、元からの華北の盟主的存在であった「晋」がこれに反対した。
(e) 紀元前482年、「晋」と「呉」での主導権争いが起こる。その時、「呉本国」が「越」に攻められ、留守を委ねたその息子である太子友が捕虜となり、兄弟と共に処刑された。
(f) 「晋」との盟主の座を争ったが、「晋」の大夫の「趙鞅」が武力に物をいわせて恫喝したので、止むなく「夫差」は諦めたという。 その後も「越」による激しい攻勢は続き、紀元前473年には遂に首都「姑蘇」が

陥落した。「夫差」は付近の「姑蘇山」に逃亡し、太夫の「公孫雄」を派遣して和睦を乞わせた。「公孫雄」は「勾践」の前で裸となり、「夫差は越王勾践さまに対して一度命を助けたのだから、あなたも一度「夫差」の命を助けていただけないか」と額を地面に擦り付けて必死に「夫差」の命乞いをした。だが、「范蠡」と「文種」らは、「ここで夫差を許してはいけません。なんのために22年間も辛苦を味わったのかわかりませんぞ！」と激しく諫めたが、勾践は「ならば、「夫差」を「甬東」の辺境に流せば再起出来まい」と言い、「范蠡」も「文種」も「それならば…」と賛成し、 こうして「公孫雄」は引き返して、夫差にその旨を伝えた。

(g) だが、「夫差」はこれを断り、「私はもう年老いたから、もう君主に仕えることはできない」と言い「伍子胥にあわす顔が無い。」と言って顔に布をかけて自殺した。勾践は夫差の死を憐れんで丁重に厚葬した。そして、呉の亡国の元凶となった伯嚭を処刑した。こうして呉は滅亡した。

始祖「忌」

祖国「呉」が滅び、王家一族は黒潮に乗って日本に渡来してきた。初代の王が「忌」である。

> 忌　字は鹿文
> 孝昭人皇三年来朝住火國山門菊池郡

九州初代の王の「忌、字は慶文」の名前をとり、国を「忌國」「姫國」或いは「倭國」「紀國」と名乗り、自らを「姫氏」または「紀氏」と名乗った。

『常陸国風土記』には「常陸は旧紀伊國だった」、と記録している。この「常陸國」とは北九州に存在した古代国である。北九州の「紀伊國」は、忌氏の国だったので、「紀伊」という名前だったのである。

旧紀伊國はどこに位置したのか。現代地名に残る僅かな手がかりを頼りに特定すると、企救半島の東海岸に門司区・吉志がある。「吉志」とは「姫氏」の名残であろう。

その渡来の時期であるが、系図では「孝昭三年」に「火國山門」に移り住んだ、と註をいれている。内倉氏は孝昭三年は皇暦孝昭三年、つまり、紀元前473年と解説している。「忌」より数えて9代あとの「熊鹿文」の時代に後漢光武帝から金印をもらった。これは西暦57年である。「忌」からこの「熊鹿文」まで、「順」「恵弓」「阿岐」「布怒之」「玖賀」「支古」「宇閉」「阿米」と9代で、この間が530年となる。この期間は長すぎる。だが次章で考察するが、9代「阿米」と10代「熊」との間には断絶がある。

熊鹿文が熊襲の始まり

西暦57年、「熊鹿文」の時世に後漢光武帝から金印を得た。「漢倭奴国王」の金印である。系図では以後「熊」王の系譜となる。松野連姫氏系図には二つの流れがあると考えられる。一つは「姫氏」で、もう一つは「熊氏」である。

系図の中の人物が「三国志・魏書東夷伝倭人の条」に登場している。景行に伐たれた熊襲の王「厚」(字は鹿文)には二人の子がいた。弟の名が「伊馨耆」で、「大夫」と横書きがある。この名は『日本書紀』には登場しない。しかし、『魏志倭人伝』には記録されている。

> 『魏志倭人伝』
> 其四年倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪拘等八人上献生口倭錦絳青縑綿衣帛布丹木拊短弓矢
> 其の四年、倭王、復、使大夫伊聲耆、掖邪拘等八人を遣わし、生口、倭錦、絳青縑、綿衣、帛布、丹、木拊、短弓、矢を上献す。

正始四年(243)、魏へ大夫伊聲耆が来た。『魏志倭人伝』の大夫伊聲耆と姫氏系図に記載されている人物とは同一人物であろう。

姫氏系図と『日本書紀』の交点「厚」

松野連姫氏系図と『日本書紀』が交差する瞬間がある。その交点に立つ人物が、「厚鹿文」「**詐**鹿文」「取石鹿文」の三人である。『日本書紀』・景行天皇に「厚鹿文」「**詐**鹿文」が登場する。彼らは景行によって暗殺された「熊襲」の王であった。日本武尊紀に登場するのは「取石鹿文」である。彼もまた暗殺される。

系図にも全く同じ「厚鹿文」「**詐**鹿文」「取石鹿文」が記されている。系図上では「熊鹿文」の後の王である。王「熊鹿文」は1世紀の人物で、景行は4世紀初頭だから、二人の時代は隔たる。従って、系図の「熊」と「厚」の間には時間が流れている。「熊」の次の王は「厚」ではない。この間には多くの王が居た。そして「熊」以降の王たちは自らを「クマソ」と自称していたと思われる。「厚」もその一人であった。故に『日本書紀』は彼らを「熊襲」と表記したのである。『日本書紀』の熊襲の王「厚」と姫氏系図の王「厚」は同一人物である。

『日本書紀』景行天皇と松野連姫氏系図が交差することで、『日本書紀』では解らなかった「熊襲」の身元が割れた。

姫氏初代の王「忌」一族を率いて渡来し、菊池郡に上陸し、そこで国を拓いた。その200年後、姫氏と同じように祖国を滅ぼされた「楚」の王家一族が王「熊」に率いられ九州に上陸してきた。いずれも弥生文明を身につけた先進民族で、日本の弥生時代は彼らよって開かれた。

熊襲王の名前の読み

「厚鹿文・**詐**鹿文・取石鹿文」はいずれも特徴ある名である。「鹿文」が共通する。しかし、これは「字(あざな)」であろう。この「字」は、姫氏初代の王「忌」の字である「鹿文」を受け継いでいる。

「**詐**鹿文」も同じように、名は「**詐**」、「字」が「鹿文」である。では、「取石鹿文」はどうか。この名も同じく中国王朝一字名と考えるべきであろう。名は「取」、「字」が「石鹿文」である。いずれも、始祖「忌」の栄光ある「鹿文」を受け継いでいる。

『日本書紀』解説者は「厚鹿文」を「アツカヤ」と読み仮名をうっている。だが、「厚」は「コウ」と読むべきであろう。「字」は「鹿文(ルーウエン)」で、「熊鹿文」は、名は「熊」、字は「鹿文」である。「熊」は神武の約百年後に生きた熊襲の王である。偉大な王「熊」は自国を「熊の楚の国」と呼んだ。その後、一字名を持つ王が、「讃」「珍」「済」「興」「武」と続く。「倭五王」と言われている王である。

熊襲の故国「楚」

古代中国の史書に「倭人」「倭國」と記された日本人は呉王・夫差を祖とする姫氏であった。戦争に敗れ、祖国「呉」を去り、偉大な王「忌(姫)」に率いられ、船団で黒潮に乗って北上し、九州各地に移住してきた古代中国呉王朝の人々であった。

だが、第10代の王の名は「熊」と云う。従って『記紀』はその國を「熊襲」と記していた。

姫氏系図において姫氏は「呉」の出身である。「呉」の王は代々「姫」と名乗った。ところが、代10代の王は「熊」という。第9代の「姫氏」の王と第10代の「熊」の間には長い断絶がある。なぜなら第10代の王の名前のルーツは「呉」ではない。「楚」の國である。

中国楚の歴史

(a) 楚は漢民族形成の母体となった黄河文明系の諸民族と異なる。長江文明の流れを汲む諸民族によって建設された。

(b) 周を中心とした中原諸国からは蛮族として蔑まれたが、独自の高い文明を持っていた。周の建国後、「楚王・熊繹」が「周王・成王」から子爵に封じられた。「周・昭王」の討伐をうけるが、撃退し、「昭王」を戦死さす。

(c) 6代目熊渠の時代に 自ら王号を称するようになった。

(d) 17代目「熊通」の時代、侯爵国であった隋を滅ぼす。それを理由に周に陞爵を願い出たが、周に断られたために再び王を名乗るようになった。

(e) 熊通が楚の初代王・武王となる。6代目荘王の時代には非常に強勢となり、陳・鄭などを属国化

し、晋の大軍を**邲**(ひつ)の戦いで破り、春秋五覇の一人に数えられる。

(f)　荘王の時代に楚は呉と同盟を結ぶ。呉は初めて歴史に登場する。

(g)　20代懐王の時代、圧倒的な強国となってきた秦に対しどう当たるかで親秦派と親斉派に家臣は二分した。親斉派の筆頭は屈原であり、懐王に対し秦は信用ならないことを強く説いたが、 親秦派の後ろにいた秦の宰相張儀の策略により屈原は失脚し、地方に左遷された。諫める者がいなくなった懐王は張儀の策略にいいように踊らされ、最後は秦に幽閉されて死去した。

(h)　その後も秦の攻勢は強くなる一方で、紀元前278年に白起により首都を陥され、陳に遷都した。その後は春申君の主導の下に項燕将軍(項羽の祖父)の活躍で秦に対して抵抗したが、春申君が死ぬとまともに国政を執れる者がいなくなり、秦の王翦将軍に項燕が敗れ、最後の王負芻は捕虜となり、紀元前223年に滅びた。

以上、「楚」の簡単な歴史である。「楚」と「呉」は同盟國であった。春秋時代の地図によると、「楚」が揚子江の上流にあり、「呉」はその河口に在った。これらの國は黄河文明と異なる長江独自の文明を築いていた。

楚王の名はすべて熊

姫氏は呉王夫差(ユウヨン)の子孫と伝わる。「呉」は紀元前473年に亡びる。そして呉の國の人々は王「忌(姫)」に率いられ北上し、有明海に入り建国した。その後、「楚」が紀元前223年に亡びる。この國の人々もまた姫氏と同じように黒潮に乗って九州へ移住してきた。彼らの王の名 前は「熊」であった。「楚」の國では六代目「熊渠」が初めて王を名 乗った。しかし、「熊」と名 乗ったのは「熊渠」だけではない。歴代全ての王が「熊」を名 乗っている。

熊繹・熊艾・熊**鼪**(または黒+旦)・熊勝・熊楊・熊渠・熊毋康・熊摯紅・熊延(執疵？)(在位？ － 紀元前848年頃)・熊勇(在位紀元前847年頃 － 紀元前838年頃)・熊厳(在位紀元前 837年頃 － 紀元前828年頃)・熊霜(在位紀元前827年頃 － 紀元前822年頃)・熊徇(在位紀元前 821年頃 － 紀元前800年頃)・熊咢(在位紀元前799年頃 － 紀元前791年頃)・若敖(熊儀、在位 紀元前790年頃 － 紀元前764年頃)・霄敖(熊坎、在位紀元前763年頃 － 紀元前758年頃)・**蚡**冒(熊**眴**、在位紀元前757年頃 － 紀元前741年)・武王(熊通、在位紀元前740年 － 紀元前690年初めて王号を名 乗る。・文王(熊貲、在位紀元前689年 － 紀元前675年)・荘敖(熊**囏**、在位紀元前674年 － 紀元前672年)・成王(熊惲、在位紀元前671年 － 紀元前626年)・穆王(熊商臣、在位紀元前625年 － 紀元前614年)・荘王(熊侶、在位紀元前613年 － 紀元前591年)・共王(熊審 在位紀元前590年 － 紀元前560年)・康王(熊招、在位紀元前559年 － 紀元前545年)・**郟**敖(熊員、在位紀元前544年 － 紀元前541年)・霊王(熊比囲、在位紀元前540年 － 紀元前529年 ・平王(熊弃疾、在位紀元前528年 － 紀元前516年)・昭王(熊珍、在位紀元前515年 － 紀元前 489年)・恵王(熊章、在位紀元前488年 － 紀元前432年)・簡王(熊中、在位紀元前431年 － 紀元前408年)・声王(熊当、在位紀元前407年 － 紀元前402年)・悼王

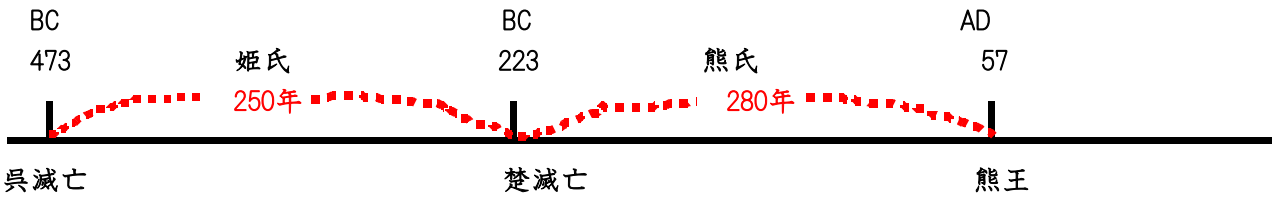
楚の国王の名は全て「熊」である。松野連系図の王「熊・鹿文」もこの楚の王名を継承している。よって、「熊」と自らを名 乗り、「楚」と国名を名 乗ったのであろう。「楚」が初めて周から独立して国王を名 乗ったのは、17代「熊通」である。その初代王の名は「武王」である。

『記紀』に登場する「川上梟師」はこの初代「武王」の称号を名 乗り、また、景行天皇の子どもに「日本武尊」という称号を与えたのである。「武」は日本語では「たける」である。故に「熊襲」の王は「梟師(たける)」なのである。「梟師」は九州天皇家の側からの表記であるが、「熊襲」自らの表記は「建」または「武」だったのあろう。

栄誉ある称号、中国楚の初代王の栄光の名 前を受け継いだ「武」だったのである。

姫氏の祖「忌」はいつ九州に渡来してきたのか。松野連系図では紀元前473年という。これは呉の滅亡の年である。滅亡と同時にその王家一族が日本に移住して来たと考えられる。

松野連姫氏系図では10代が「熊」である。「熊」は楚の国王の名 前である。彼らは楚が紀元前223年に滅亡して後、姫氏と同じように黒潮に乗って九州に移住してきた。楚の国王は代々熊を名 乗っていた。松野連姫氏系図では第10代の熊王の時に「漢委奴國王」の金印をもらっている。これが西暦57年である。



初代の王「忌」から「熊」まで約530年間である。平均して一代53年となる、これは当時の寿命から考えても長すぎる。どこかで長い断絶があったと思われる。それが「阿米」と「熊」の間ではなかろうか。「熊」が生きていたのは西暦57年である。この時は熊の祖国楚が滅びて280年経過している。熊の祖先が祖国滅亡後九州に渡来してきたと考えると、「阿米」と「熊」の間に断絶があったということになる。「忌」から「阿米」の間を250年とすると平均30年である。

九州には「呉」出身の王朝と「楚」出身の王朝の二つが存在した。「呉」の姫氏建国の國は「忌國」と呼ばれた。第二代王「順」が建国した国が「委奴国」である。この國が吉野ヶ里遺跡である。吉野ヶ里遺跡は2世紀には衰退した。現在の佐賀市に移転したからである。『魏志倭人伝』の「伊都國」がそれである。姫氏に遅れて古代九州を支配したのが熊氏である。神武が戦ったのはこの「熊襲」である。

熊襲と神武天皇家の歴史

ここで神武天皇家と熊襲の年表を作成してみよう。

天皇王朝	在　位	系図(姫氏･熊氏)
1神武	BC52～BC14	
2綏靖	BC14～AD2	
3安寧	2～21	
4懿徳	21～38	
5孝昭	38～79	57　倭王熊(鹿文)、後漢光武帝･金印「漢倭奴國王印」を授与
6孝安	79～130	
7孝霊	130～168	
8孝元	168～196	
9開化	196～224	
10崇神	224～258	
11垂仁	248～273	
12景行	273～311	倭王厚(鹿文)、景行に暗殺される。娘市鹿文を「火国造」に任命
倭建	311～333	倭王取(石鹿文)、倭建に暗殺される
13成務	333～356	
14仲哀	356～360	
神功	360～386	
15応神	386～402	
16仁徳	402～434	421　倭王讃、宋に朝献、武帝から徐綬の詔受ける
17履中	434～437	
18反正	437～439	438　倭王珍、安東大将軍倭国王とする。宋文帝元嘉2年遣使
19允恭	439～454	443　倭王済、宋に朝献して安東将軍倭国王とされる
20安康	454～456	
21雄略	456～479	462　倭王興、宋孝武帝、興を安東将軍倭国王とする
22清寧	480～485	477　倭王武、上表して自ら開府儀同三司と称し、叙正を求める。
23顯宗	485～487	順帝、武を六国諸事安東太将軍倭国王とする。
24仁賢	488～498	
25武烈	499～506	502　梁の武帝、王朝樹立に伴い、倭王武を鎮東太将軍に進号

26継体	507～531	527	磐井の乱
27安閑	532～535		倭王哲
28宣化	536～539		倭王満
29欽明	540～571		倭王牛（慈）、金剌宮（欽明）御宇服降、「夜須評督」に任命される
30敏達	572～585		
31用明	585～587		
32崇峻	588～592		
33推古	593～628		
34舒明	629～641		長提、小墾田朝（推古）「評督」・ 618年唐建国
35皇極	642～645		
36孝徳	645～654		
37斉明	655～661		大野
38天智	668～672		廣石・ 662「白村江」
40天武	673～686		
41持統	687～		津風呂、甲午の年、松野連姓

＊澁谷雅男氏「崇神天皇の崩年を西暦258年とする」を基準に作成。

神武天皇家の史書『記紀』は「倭五王」「金印」「卑弥呼」「邪馬壱国」について何も記録していない。古来、中国王朝と交渉してきた「倭人」とは「姫氏」で、やがて、「熊氏」が取って代わった。神武天皇家は「姫氏」であるが、中国王朝との交渉はなかった。神武天皇家の領土は九州東北部で、中国王朝と交渉してきた「倭人（姫氏、熊氏）」の国は有明沿岸にあった。

神武の「東征」先は熊襲の支配下にあった「倭国」である。。従って、神武東征は熊襲との戦いとなった。また、景行が戦った国もやはり熊襲の国だった。古代九州では姫氏と熊氏が時には同盟し、また戦うという歴史を繰り返していたのである。

是を熊襲の八十梟師と謂う。其の鋒（つわもの）当たるべからず。師を興すことは少なくは、賊を滅すに堪えじ。多に兵を動さば。是百姓の害なり。何か鋒刃の威を借らずして、座づから其の国を平けむ

『景行紀』

王「牛（慈）」の「投下」

「牛（慈）」には傍書きがある。

金剌宮の御宇服、夜須評督と為る

この傍書きの内容が『日本書紀』・欽明にある。

欽明元年(540)秋七月十四日に、都を倭國の磯城郡の磯城嶋に遷す。よりて号けて磯城嶋金剌宮とす。

八月に高麗・百済・新羅・任那、並びに使いを遣して献り、並びに貢職たてまつる。秦人（はたひと）・漢人（あやひと）等、諸蕃（となりのくに）の投化（おのずからまう）ける者を召し集へて、国郡に安置（はべらし）めて、戸籍（へのふた）に編貫（つ）く。秦人の戸（へ）の数、総（す）べて七千五十三戸（ななちへあまりいそあまりみへ）。大蔵掾（おおくらのふびと）を以て、秦伴造（はたのとものみやつこ）としたまふ。

欽明元年八月の記事はまさにドンピシャである。「秦人」・「漢人」が投化している。その数、7053戸である。一戸10人～30人としても相当の人口となる。「牛（慈）」の時に熊襲は独立王朝としての歩みをやめた。九州は神武天皇家の下に統合されたのである。